

研究ノート

ヤクート人とサハ共和国（ヤクーチア）

木村 英亮

はじめに

1. ヤクート人とロシア人
2. ロシア革命前のヤクーチア
3. ヤクート自治共和国の歴史
4. サハ共和国の自立
5. ヤクーチアの言語
6. 資源と産業

むすびー ヤクート人、サハ共和国と日本

キーワード：ヤクート人、サハ共和国、ロシア、ダイヤモンド、ニコラエフ

はじめに

極東地方のヤクーチアは、面積310万3200km²、ロシアの18%を占め、民族的国家的組織の中では最大で、日本の8倍以上の広さをもつ。しかし人口は、2000年1月現在98万8600人（99年都市63.38万人、農村35.48万人、勤労者47.8万人、失業者0.59万人）にすぎず、人口密度は1km²当たり0.3人である。89年の民族構成は、表に示したように、ヤクート人33.4%、ロシア人50.3%、ウクライナ人7.0%、その他9.3%で、少数民族のエヴェンキは1万4428人、エヴェン8668人、チュクチ473人、ドルガン408人、ユカギール697人である（Sirina-3）。首都ヤクーツクは2000年1月19.64万人（89年の民族構成はヤクート人25.4%、ロシア人62.2%（Narody-447）、

ネリュングリ7.43万人、ミールヌイ3.66万人である（Regiony-467）。

この国はダイヤモンドや金を産出する他、石炭や天然ガス、鉄鉱石、錫も大量に埋蔵している。レナ川北方湾曲部低地と東の支流アルダン川下流域はカラマツに覆われており、牛馬用の牧草・干し草に富む。

チュルク系のヤクート人は17世紀に勢力を確立した。ロシア人は、ヤクーツクを行政、交易の中心地としてヤクート人からクロテンなどの毛皮を集めた。

本稿は、この国について、現状と歴史を概観することを目的とする。

最初に、自然地理を概括しておきたい。

中央を南北にヴェルホヤンスク山脈が縦走り、シベリア海に達する。その東にはほぼ並行してチュルスキー山脈が連なる。南にはアルダン台地があり、その南に走るスタノヴォイ山脈は、アムール州との境界をなし極東全体の分水嶺を形成している。共和国の65%はレナ川とその支流の流域である。ビリュイ、アルダン、アムガ等1000kmを超える支流だけで8河川ある。その他、オレニョク、インジギルカ、ヤナ等の独立の河川がある。

サハは、40%が北極圏に属し、世界で最も気温の低い寒極をもつ国である。日本に寒気をもたらすシベリア寒気団は、この周辺でつくられ

表 ヤクーチアの民族構成 %

	1926	1939	1959	1970	1979	1989
総人口 (千人)	287.3	413.2	487.3	664.7	851.8	1094.1
うち						
ロシア (人)	10.4	35.7	44.2	47.3	50.4	50.3
ヤクート	81.6	56.5	46.4	43.0	36.9	33.4
エヴェンキ	4.5	2.5	1.9	1.4	1.4	1.3
エヴェン	0.3	0.8	0.7	0.9	0.7	0.8
ウクライナ	0.05	1.0	2.5	3.0	5.4	7.1
タタール	0.58	1.1	1.0	1.1	1.3	1.6
ベラルーシ	—	0.4	0.5	0.6	0.8	0.9
その他	2.57	2.0	2.8	2.7	3.1	4.6

Fedorova-57, 86.

る。とくに寒気が強いのは、ヤクーツク市、レナ下流、コリマ下流を頂点とする三角形の中にあり、東部には「寒冷帯」と呼ばれるオイミコヤン台地がある。

ヤクーツクの7月の平均気温は、18.8度であるが、これは昼夜の平均であって、夏でも夜間には降霜を見ることがあり、昼間は長く猛暑となる。サハの冬の平均気温は-50度で、レナ川の氷は3mを越す。風が弱いので屋外作業ができるが、「口で息をするな、ひとりでの外出を慎め」と注意される(勝木-01.6.15)。

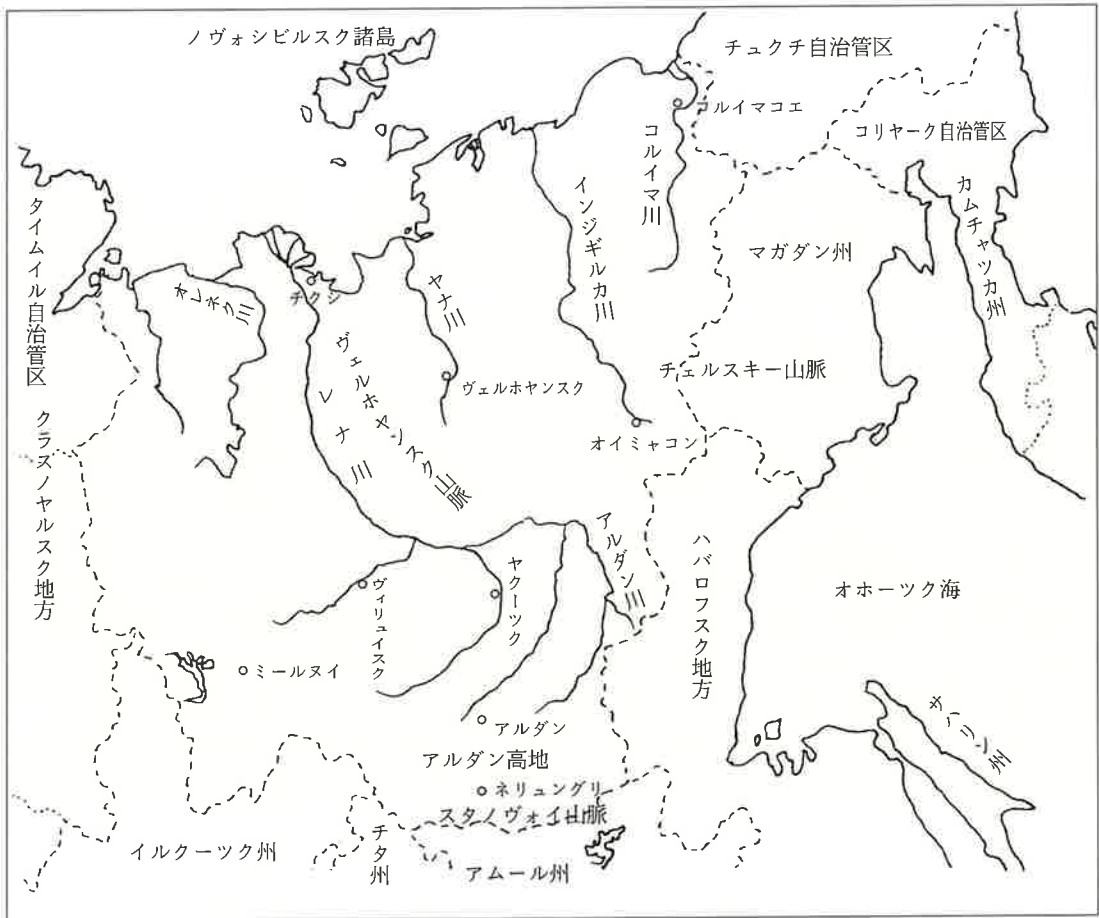
1. ヤクート人とロシア人

ヤクートの名称はエヴェンキ語のヤコリツィに由来し、自称はサハである。ロシアに38万242人、うちサハ共和国に原住民族として36万5236人、ブリヤート共和国に705人、チュクチ自治管区に111人、エヴェンキ自治管区に937人が居住する。ロシア以外の旧ソ連の共和国には、ウクライナに619人、カザフスタンに314人など合わせて1680人である。基本的グループは、アムガ・レナ(レナ川、アルダン川下流とアム

ガ川の間、レナ川左岸)、ヴィリュイ(ヴィリュイ川流域)、オリョクマ(オリョクマ川流域)、北部(アナバル、オレニョク、コルイマ、ヤナ、インジギルカ各河川流域のツンドラ地帯)のグループに分類される(Narody-430、Pis'mennye-575)。

ヤクート語を話すが、それは、中央、ヴィリュイ、北部・西部、タイムイルの諸方言をもつ。ロシア語を話すヤクート人はロシア全体で1万7671人、うちヤクーチアでは1万3600人、ヤクート語を話す者は、ロシア全体で39万1250人である。この数字は、エヴェンキ、エヴェン、ユカギールなどヤクート人とともに暮らしていた少数民族もヤクート語を使用していることを示している。たとえば1979年に、ヤクーチアの5763人のエヴェン人の44%がエヴェン語を母語としているとはいえ、53%がロシア語も修得し、70%がヤクート語を使用していた。1万1584人のエヴェンキの85%がヤクート語を母語としていた(Forsyth-380, 訳408、cf.Ivanov,A.N.)。

このような条件の下で、ヤクーチアではヤクート人が、自信をもってきた。ソヴェト期、ロシア人労働者の流入によって、ヤクート人の比率



は、1926年82%から59年47%、79年37%、89年33%と減り、ロシア人が半数を占めるようになったが、非現実的とも言えるような民族的自尊心は保持され、自立の動きのバックボーンをなしていると考えることができよう。

ヤクート人の起源について、加藤九柞はG. V. クセノフォントフ、A. P. オクラドニコフに拠り、「バイカル湖付近に住んでいたチュルク族、とりわけ『旧唐書』鉄勒伝にでてくる骨利幹（クリカン）が北方へ移動し、現地の民族と融合したと考えられている。」（加藤-105）としている。勝木英夫は、「近年、オクラマ川流域で3-5世紀のチュルク系文化の遺跡の発

掘が進み、この文化の担い手がオドゥールあるいはサモエド系の民族と混血をくりかえすなかで最終的に12世紀頃にサハ人が形成されたとする説が提起され、支持を広めつつある。」と、1994年のA. N. アレクセーエフの説を紹介し、「移住説に対する自生説の提唱であり、今後の展開が注目されている。」（勝木-21）と述べている。

2. ロシア革命前のヤクーチア

17世紀、ヤクート人はレナ川北方湾曲部の低地と東側支流アルダン川下流のカラマツ森林地

帯・牧草と干し草の豊富な地帯に、南部から移住して来た。彼らは鉄の使用に通じ、極北では混血によってドルガン人を形成した。

ロシア人は毛皮を得るために移住し、1632年砦としてヤクーツクを建設した。ヤクート人は牛馬飼育からクロテンなどの狩猟に移り、17世紀後半には、住民はヤサク（税）を金納するようになった。

ヤクーツクは、ロシア人の行政と交易の中心地として発展し、1650年までに2000人近くがこの地区に住むようになった。ロシア人は、氏族の首長で、1677-78年に地位を強化されたトヨンを通じてヤサクを徴収した。しかし、クロテン、クロキツネ等市場価値の高い動物はたちまち取り尽くされ、1681-82年にはヤクート人の反乱がおこった。トヨンの権限は、1752年の納税法によって強められた。彼らは、ロシアの貴族と一体化しようとして、固有の文化を主張した。1822年トヨンのステップ議会の支配下におかれ、ヤクート語やシャーマンの特徴は保持された。

この地域に多く流されてきた流刑囚は、自分たちもヤクートの言語や文化も学び、政治思想を広めて1905年革命時の民族運動を準備した。流刑は17世紀半ばに始まり、農奴制廃止の1861年まで、刑罰としてばかりでなく、強制的植民の手段ともなり穀作の拡大を促した。1820年代末から、より重要な政治犯、まずデカブリスト、1863-64年のポーランド蜂起参加者（140人）が対象とされ、1872-83年にはヴィリュイ監獄にN. G. チェルヌイシェフスキー、1881-84年アムクにV. G. コロレンコ、1870-80年にヤクーチアにはナロードニキのO. V. アプテクマン、M. A. ナタンソンら313人、最初の革命的労働者P. A. アレクセエフ、I. V. ルイビツキーらが流刑された（Sovetskaya-876）。1869年には、

アレクサンドル2世暗殺未遂のカラコゾフ事件で逮捕、終身流刑されたI. A. フジャコフが、ウェルホヤンスクで気象観測を行い、零下63.2度を記録した（フィリポヴィチ-121-134）。これらの流刑囚は1889年にはヴィリュイスク、スレドネコルムスクで「ヤクート悲劇」と呼ばれる事件をおこし、死者6人、負傷者7人、処刑者3人をだした。19世紀末から流刑者は急増し、1901年1月には3540人に上った。

1901-04年に300人の革命家が刑期を終わったが、04年には、政治流刑囚の武装蜂起「ヤクートの抗議」と呼ばれる事件がおこった。これは03年8月16日と20日、イルクーツク総督クタイソフの、「無断外出」に対する厳罰、流刑囚グループの交際禁止を内容とする通達に56人が公開状で撤回を要求した事件である。06年後も毎年流刑が行われ、10年には3000人に達した。

1916年の原住諸民族の戦時後方作業への動員は、ヤクート人の反政府意識を強め、民族運動に点火した。

3. ヤクート自治共和国の歴史

1917年二月革命当時ヤクーチアでは、E. M. ヤロスラフスキー、G. K. オルジョニキゼ、G. I. ペトロフスキーら500人以上の政治流刑囚が活動を強めていたが、3月に恩赦された。5月ヤロスラフスキーを指導者とし、メンシェヴィキとエスエルを多数派とする労兵合同ソヴェットがつくられた。この直後、多くは中央に戻り、ヤクーチアのポリシェヴィキは弱体となった。その後、エスエルや民族主義連合「サハ・アイマク」、軍事代表者会議などが権力を競い、10月にはレーニン政府を拒否して、「革命防衛委員会」を創設、18年2月独立を宣言した。

1918年7月1日、イルクーツクから来た赤軍

部隊によってヤクーツクにソヴェト権力が樹立され、社会主義的改造が開始されたが、8月にはコルチャク軍に占領された。

1919年12月14日から15日にかけての武装蜂起でヤクーツクに軍事革命本部が成立し、20年6月には、共産党ヤクート・シベリア局に党・ソヴェト・経済の働き手グループが到着し、党組織が整えられた。22年までに銀行、商業企業、工業企業、土地が国有化され、地主的土地所有はなかったが教会や官有の土地も国有化された。

1921年末、暴動が相次ぎ、22年3月にはチュパプチュに「臨時ヤクート州管理局」が創設され、ハルビンのロシア人亡命グループを支持した。まもなくA. N. ペペリャエフ将軍の「シベリア義勇軍」が形成されてウラジヴォストクからヤクーツクに向かった。S. S. ヴォストレツォフ率いるオホーツク・アヤン遠征軍が創設され、23年7月17日、ペペリャエフは降伏した（革命期の歴史はCf. Demidov, Kuznetsova, Novgorodov, Sanzhiev, Velikaya, Sovetskaya,）。

1922年4月27日、全ロシア中央執行委員会幹部会令によってロシア連邦共和国内にヤクート自治共和国が創設され、12月27日の全ヤクート・ソヴェト第1回創設大会で共和国の中央執行委員会と人民委員会が選出された。24年にはヤクーチア最初の憲法が採択される。

1929年によりやく着手された土地改革で、勤労経営は15万haの土地を受け取った。27-28年の反乱のさいしては、125人の財産が没収され、2万8千頭のトナカイが集団化された。北部では激しい抵抗のためトナカイの集団化は40年によりやく行われた。31年には東北部で一部の領域が減らされ、チュクチ、コリヤークの民族管区に割り当てられた（Forsyth-315-317, 訳342-344）。この時期、治安情報機関の全所的中央集権化が進んだ。また五カ年計画による経済

改革・建設によって、40年までに家父長的・封建的経営形態はなくなり社会主義経済体制が実現した。

この期、1924年にアルダンで、27年にはコルイマ川上流でも金鉱が発見され、採掘が進んだ。33年アルダンの金鉱労働者3万8000人の多くは朝鮮人と中国人であった。（Forsyth-319, 訳346）。37年、全ヤクート第9回特別ソヴェト大会で新しい憲法が採択されたが、40年までの時期には大粛清のため、「サハ・オムク」、「ヤクトゾロト」などの活動家が犠牲となった（Cf. Ivanova, Stephan-225-232）。農業の面では40年までに集団化が終わり、播種面積の93.2%が集中化された。

大戦中には5万人が前線に出、錫と雲母工業が創設され、金、タングステンの採掘、製作、漁業も発展した。

戦後はダイヤモンド、鉄の他、南アルダンの金、タングステン、石炭、西地区のダイヤモンド、林業、ヴェルフネインジギル地区の金、ヴェルフネヤンスキーの錫、金、中央地区の建設資材、石炭が発展した。農業では、1973年コルホーズ15ソフホーズは58となった。

4. サハ共和国の自立

サハでの深刻な民族間衝突は1979年にまでさかのぼりうる。それはここに追放されていたウクライナの人権活動家が記録しているようである（Fondah-1213, Forsyth-381, 訳409）。首都ヤクーツクでは大規模なデモなどが80年代を通じて続き、86年6月にはヤクート人とロシア人の衝突事件があったが、最後の数年間は、旧来のサハ人とロシア人がロシア人新来者と衝突するという事件も増えた。ヤクーチア自体には環境破壊や地域に何の利益ももたらさない資源開

発に対して、古い住民が不満をもつようになったのである。

1990年サハ文化の保存と再生の組織として「サハ・オムク」の活性化がおこった。3月25日には、党書記局を仕切っていたミハイル・ニコラエフが、党ヤクート州委員会の基本政策として貴金属、毛皮などの原料への課税による政治的・経済的自立を訴え、人民代議員に選出され、やがて共和国最高会議議長に就任した。9月27日、サハ共和国は主権宣言を行なって地位を高め、ヤクート・サハ共和国と改称した。非サハ人が人口の過半数を占めていたが、名称民族であるサハ人の支配が強まった。しかしこの動きは民族主義的であると同時に地域主義的なものであり、サハ政府の主な関心は、政治的自治より経済的自治にあった。

1991年12月20日、最高会議議長のニコラエフが、投票率75%、得票率76.7%で初代大統領に選出された。92年3月31日、サハは、ロシアと連邦条約を締結し、続いて4月4日にロシアで最初の憲法を採択した。しかしながら、土地や地下資源に対するサハの排他的な要求は、ロシアの憲法や連邦条約とも矛盾していた。95年6月29日にはロシア政府と5番目に権限区分条約を締結してこの点をただし、翌96年12月22日、ニコラエフは大統領に再選される（Cf.勝木、Fondahl, Minahan）。

ニコラエフ大統領の下で経済状況は好転はしなかったが、下降率は周辺のシベリアの諸地域に比べ小さい。共和国から外への移住は少なく、資源開発やインフラ整備に対するアメリカ、日本、韓国などの投資もあり、国立大学には経済学部が設けられた。

北方小民族は、1992年憲法で法的には権利を認められたが、90年代初期の市場経済化のなかで、運輸の面から伝統的経済活動はできにくく、

アルコール中毒、自殺、殺人などが広がった。またソヴェト時代には、ヤクーチアに北方諸民族省があったが、全民族グループのための省の一部局となるなど、政府組織の構造的な変更によって、北方諸民族集団としての意見は聞かれなくなった（Fondahl-215）。これらの民族集団には民族共同体（rodnyaya abshchina）が形成され、その数は1992年末の28から98年には208となった。これは97年までに、伝統的経営である狩猟、トナカイ飼育、漁労のための土地を4720万ha（47万2000km²、全土の約15%）を所有あるいは賃借した（Cf.Sirina）。

5. ヤクーチアの言語

ヤクート語は、チュルク語族ウイグル・オグズ語派ヤクート語支に属し、1で記したように、サハ共和国、クラスノヤルスク地方北部、マガダン、イルクーツク、アムール諸州、ハバロフスク地方のヤクート人、ヤクート化されたエヴェンキなどの民族、全体でおよそ39万人によって話されている。

ヤクート文字は、1812年刊行の出版物に使用されたものが最初で、1819-22年G.ポポフがキリル文字を基礎として、ヤクート語の本を出版した後、革命前およそ128点の図書が刊行された。ヤクート文語は、19世紀から20世紀初めにかけて形成されたが、その源泉は口碑、ヤクートの文献、ヤクート文学の古典である。ヤクート文学は20世紀初頭に生まれたが、創始者はA. E.クラコフスキー、A. I. ソフロノフ、N. D. ネウストロエフである（Gosudarstvennye-295）。1897年のヤクート人の識字率は、0.7%であった。

革命後1929年までの時期は、文学の普及、言語の社会的機能の拡大が見られ、26年のヤクー

ト自治共和国憲法でロシア語と並ぶ国家言語として承認され、ラテン文字を基礎とする文字が導入された。当初21年設立の文化団体「サム・オムク」や民族主義的文学雑誌『チョルボン』が許容されていたが、28年党中央の干渉でヤクーチアの党指導者などが罷免され、8月8日の声明で富農やトヨンの支持や少数民族無視を非難され、「サム・オムク」は解散され、チョルボンは再組織された（Cf. Kolarz-102-112, 訳 159-177）。

1930年から40年の時期には、より簡略化されてチュルク文字に近づけた文字が採用され、正字法の仕上げ、術語作成、標準的な辞書・教科書の出版が行われ、文学・政治経済その他の文献・定期刊行物の出版が増大し、文体がますます多様化した。

1940年から60年までの時期、キリル文字を基礎とする新文字に移行し、音声学・正字法、文法、語彙の規準が定められた。44年ヤクート語で出版を行っていた歴史家G. P. バシャリンらは、51年12月10日の『プラウダ』で攻撃された。コラーズは、「第二次大戦後にソヴェトの宣伝家がヤクーチアにおけるロシア人の文化的役割について言ったことの多くは歴史的に見て正しいことである。しかし、文化的な植民国で、植民地民族の遅れていることをこれほど大々的に宣伝し、当の民族にそのことを認めさせる国はロシア以外にないであろう。」（Kolarz-112, 訳 177）と評価している。

1960年以降80年までの時期、規格化の強化、新正字法集成の編纂、学術的標準辞書・文法書の出版、教科書の内容の刷新、文学的規範の意識的導入への方向付け、機能的文体の強化が行われた。1980年以降今日までの時期は、全人民的伝統的言語規範に基づく国家言語の復活への広範な運動、法的基盤の創設、サハ語の国家言

語としての復活の広範な国家計画の作成を特徴とする（Gosudarstvennyye-295）。

1992年、サハ共和国憲法採択後に定められた「サハ共和国の言語について」の第4条で、サハ語が国家言語とされ、第5条でロシア語が「国家言語であり、民族間交流の手段として用いられる」とされ、さらに第6条で、「エヴェンキ、エヴェン、ユカギール、チュコトの各言語は、これらの諸民族の居住地で、地区の公的言語として認められ、国家言語と平等に利用される」とされた（Pis'mennyye-579）。

信教はロシア正教であるが、6月末のウスィアの祭りはシャーマンが主催する。（勝木—6.15）。イスラムの影響はない。

6. 資源と産業

サハはロシア唯一のダイヤモンド生産地域で、世界の生産量の2—2.5割を占める。1954年に西南部ビリュイ川の上流で発見された。金もロシアの生産の2割、30—33tを産する。錫も含有度の高いものが、ヤナ・インジギルカ川流域に埋蔵されている。その他アンチモン、タングステン、ニオブ、チタン等があり、雲母も採掘されている。

アルダン・チュリマン地区の鉄鉱石・石炭を基礎として、バム（第二シベリア鉄道）建設に伴って南ヤクート生産コンプレクス建設が計画され、日本も資金協力などで参加した。石炭生産は1975年には200万tにすぎなかったが、ネリウングリの生産が軌道に乗った85年には1千万tに達した。その埋蔵量は、45億8000万tと見込まれる。天然ガスは、確認埋蔵量8970億 m^3 、推定埋蔵量4510億 m^3 、予想埋蔵量9兆560億 m^3 と評価されている（勝木—16）が、本格的生産はこれからである。製造業は、木材加工、食品な

どの軽工業が若干あったが、金属加工や機械製造などの部門はほとんどなかった。

1998年の部門別産業構成は、鉱工業41.1%、農業2.6%、建設6.6%、運輸4.9%、商業7.9%で、鉱工業の比重が高いが、その中では非鉄金属が77.4%と圧倒的に大きく、その他燃料10.3%、電力7.4%、食品2.2%、機械・金属加工0.4%、建設資材0.6%、林業・木材加工・製紙0.7%、軽工業0.2%である（主な数字は Regiony-537 による）。

極東地域の木材蓄積量204億m³のうち、共和国には92億m³があるが、その大部分がカラマツで、半分以上は建築用材に向かない灌木に近いものである。商品価値のある樹木は南部にあるが未開発である。木材蓄積は東シベリアの方が大きい（近藤-99.12.15）。

木材輸出には林道や道路の建設、運搬機械、ブルドーザー、チェーンソーなどの設備投資が必要である。

農業は畜産が中心で、1999年、価格にして農耕が27.8%、畜産が72.2%である。ソヴェト時代末期大部分ソフホーズ経営で行われていた。播種面積は、85年11万ha、99年6万haで、99年穀物が45.0%、ジャガイモ、野菜19.4%、飼料35.7%を占めた。最近飼料の比率が減り、ジャガイモ、野菜が増大している。馬は厳冬期にも屋外の放し飼いができ、クムイスをつくれるが、牛は冬期に舎飼が必要で、9カ月分の飼料を用意しなければならない。肉、乳製品は自給できるが、野菜、果物は少ない。牛の頭数は、1985年39.67万頭（うち乳牛14.33万頭）、99年28.45万頭（10.99万頭）、豚はそれぞれ6.46万頭、3.28万頭である（Regiony-539）。なお、トナカイ頭数は98年ロシアの16%、40万頭である（Regiony Rossii-358）。

ソ連解体前、重点投資地域であったが成長率

は小さかった。それは根幹をなす鉱山業の採掘現場が輸送困難な地域にあるからで、今後も運輸の開発が課題である。域外との関係では、シベリアとのつながりが強い。ガスパイプラインは、極東-日本、東シベリア-中国-朝鮮-韓国のルートが考えられる（Boiko-63）。鉄道は、バムのトゥインダから北に支線が伸び、アルダン、ネリュングリに通じた。道路の建設が最も重要で建設投資の4割以上はここに投じられている（Gavril'eva-55）。冬期、河川、沼沢、ツンドラの凍結した雪上を道路として利用する。レナ川を中心とする船舶輸送は、夏期4カ月しか利用できない。航空網の拡大も必要である。

むすびー ヤクート人、サハ共和国と日本

ヤクーツクには、1748年頃、千島列島オネコタン島に漂着した4人の日本人を教師として、ペテルブルクに次ぎ、世界で2番目の日本語学校が開かれた。これは1754年にイリムスクへ移転し、60年にイルクーツク日本語学校に吸収されたが、イリムスク校を卒業したアンチーピンは、後厚岸で松前藩との交渉に参加したと言われている（勝木-7.15）。

1991年勝木英夫がヤクーツクで日本語などを教えるようになったとき、「西側」出身の住民はひとりだけで珍しがられたと書いている（勝木-8.15）。99年には、科学研究費による現地調査なども行われるようになったようである（小長井）。その前の記述を探してみると、1972年の夏に、山本敏が、物理、生物の専門家とともにヤクーツク周辺やミールヌイを訪れたことを記録している（山本-15-20）。

ソ連崩壊後、極東地方全体としては、木材加工工業、紙パルプ工業は完全に淘汰されつつあ

り、丸太輸出、製材部門が伸び始めているようであるが、インフラの維持・建設に莫大な投資が必要とされている（近藤-00.3.15）。鉄鉱石、石炭、天然ガスなど地下資源も豊富であり、日本と経済的補完関係がある。しかも、1973年に Gosplan 付属生産力配置研究委員会議長 ネクラソフが「ヤクートの重要性」と題して強調しているように、モスクワなどの中央から最も遠く離れた経済地区にある共和国である（ネクラソフ-199）。63年までは、東シベリア経済地区に含まれており、現在でも経済的潜在力をもつシベリアとのつながりが深い。

この地域の民族であるヤクート人の暮らし方は日本人と違い、悠々としているようである。多数民族であるロシア人との関係も悪くない。山本が、大戦中にヤクート人が多数戦死したことについて聞くと、「たしかにロシア人よりは多い割合で第一線にだされたようだ。けどそれは、ヤクート人は射撃がうまいからだろうよ。・・・お前さんのように、何でもロシア人を鬼に仕立てようとするのではないよ。」（山本-17）とヤクート人老婆が答えたことと記している。ヤクート人は、30-50m からリスの目を狙い一発でしとめる。この能力が、スターリングラード戦線で狙撃兵として活躍させることになった（フィリポビッチ-95）。これもヤクート人の一面である。

サハ共和国自立の経済的基礎であるダイヤモンドや金は、主としてロシア人によって、ロシア人の多い地域で採掘されており、全体としても共和国人口の過半数を占めるロシア人との関係が重要である。このような民族的状況は、北方少数民族問題とともに、われわれが常に念頭に置いておかねばならない。

参考文献

- 勝木 英夫「自立・非核の共和国 サハ」『ユーラシア研究』11号、1996. 4.
- 勝木 英夫「ヤクートの三つの顔」『日本とユーラシア』2000. 6. 15, 7. 15, 8. 15.
- 金田 辰夫「ヤクート自治共和国」『ソ連極東総覧』、エンタプライズ、1987. 9
- 加藤 九柝『東北アジア民族学史の研究』、恒文社、1986. 3.
- 小長谷有紀「サハの馬乳酒まつり」『季刊 民族学』90号、1999. 10
- 近藤 房夫「商社員のみたロシア」11, 14, 『日本とユーラシア』1999. 12. 15, 2000. 3. 15.
- 中村 逸郎「サハ共和国」ユーラシア研究所編『情報総覧 現代のロシア』、大空社、1998. 2
- 南満州鉄道株式会社庶務部調査課編『露亜経済調査叢書 ヤクット共和国』第1巻、大阪毎日新聞社、1930. 2.
- 同上『露亜経済調査叢書 西比利の行政経済事情』下巻、1929. 6.
- 護 雅夫他編『北アジア史』、山川出版社、1981. 8.
- 山本 敏「ヤクーチア管見」ナウカ社『窓』4号、1973. 4
- シムチェンコ、Y. B., 加藤 九柝訳『極北の人たち』、岩波新書、1972. 12.
- ネクラソフ、N. N., 鈴木 啓介訳『シベリア開発構想』、サイマル出版会、1975.
- フィリポビッチ、N. Y., 岡田 安彦訳『寒極シベリア 極限の記録』、世紀社、1975. 1
- Fondahl, G., *Siberia : assimilation and its discotents*, Bremmer, I. and Taras, R. (ed.), *New States, New Politics, Building the Post-Soviet Nations*, Cambridge Univ. Press, 1997.

Forsyth, J., *A History of the Peoples of the Siberia, Russian North Asian Colony: 1581-1990*, Cambridge Univ. Press, 1992. (森本和男訳『シベリア先住民の歴史、ロシアの北方アジア植民地 1598-1990』、彩流社、1998.)

Kolarz, W., *The Peoples of the Soviet Far East*, Frederic A. Praeger, Inc., London, 1954. (谷口勝訳『ソヴェト極東民族誌』国際文化研究所、1956.)

Minahan, J., *Nations without States, a Historical Dictionary of Contemporary National Movements*, Greenwood Press, 1996.

Stephan, J. J., *The Russian Far East, a History*, Stanford Univ. Press, 1994.

ロシア語文献 ロシア語アルファベット順

- Alpatov, V. M., *150yazykov i politika. 1917-2000. Sotsiolingvisticheskie problemy SSSR i postsovetskogo prostranstva*, M., 2000.
- Azarova, A. A., *Gosudarstvennaya sobstvennost' Respubliki Sakha (Yakutiya)*, Novosibirsk, 2000.
- Boiko, V. I. i dr. (ed.), *Sibir' v geopoliticheskom prostranstve 21beke*, Novosibirsk, 1998.
- Gavril'eva, T. N., *Investitsionnaya politika Respublika Sakha (Yakutiya)*, Novosibirsk, 2000.
- Gogolev, Z. V., *Sotsial'no-ekonomicheskoe razvitie Yakutii (1917-i yun'1941gg.)*, Novosibirsk, 1972.
- Demidov, V. A., *Oktyabr' i natsional'nyi vopros v Sibiri*, Novosibirsk, 1983.
- Ivanov, A. M., *Etnopoliticheskaya situatsiya v Respublika Sakha (Yakutiya)*, Dokument No. 61, M., 1964.
- Ivanov, V. N. (otv. red.), *Istoriko-etnosotsial'nye issledovaniya: regional'nye problemy*, Novosibirsk, 1998.
- Ivanova, T. S., *Iz istorii politicheskikh repressii v Yakutii (konets 20-kh-30-e gg.)*, Novosibirsk, 1998.
- Kuznetsova, F. S., *Istoriya sibiri*, Chast'1, Novosibirsk, 1997.
- Novgorodov, A. I., *Oktyabr'skaya sotsialisticheskaya revolyutsiya i grazhdanskaya voyna v Yakutii*, Novosibirsk, 1969.
- Okladnikov, A. P. (glav. red.), *Istoriya sibiri*, Tom 4, Leningrad, 1968.
- Sanzhiev, G. L., *V. I. Lenin i natsional'no-gosudarstvennoe stroitel'stvo v Sibiri (1917-1937gg.)*, Ulan-Ude, 1971.
- Sirina, A. A., *Rodovye obshchiny malochislennykh narodov severa v Respublike Sakha (Yakutiya)*, *Shag k samoopredeleniyu*, Dokument No. 126, M., 1999.
- Spiridonova, I. E., *Etnokul'turnoe vzaimodeistvie i mezhnatsional'nye otnosheniya v Yakutii*, Novosibirsk, 1999.
- Fedorova, E. N., *Naselenie Yakutii, proshloe i nastoyashchee*, Novosibirsk, 1998.
- Chernov, P. V., *Rossiya: etnogeopoliticheskie osnovy gosudarstvennosti*, M., 1999.

辞典類

Chto nuzhno znat' o narodakh Rossii. Spravochnik, M., 1999.

Goroda Rossii. Entsiklopediya, M., 1994.

Narody Rossii. Entsiklopediya, M., 1994.

- Gosudarstvennye yazyki v Rossiiskoi Federatsii. Entsiklopedicheskii slovar'-spravochnik*, M., 1995.
- Pis'mennye yazyki mira. Yazyki Rossiiskoi Federatsii. Sotsiolingvisticheskaya entsiklopediya*, Kniga1. M., 2000.
- Sovetskaya istoricheskaya entsiklopediya*, 16, M., 1976.
- Velikaya Oktyabrskaya sotsialisticheskaya revolyutsiya: Entsiklopediya*, M., 1987.
- Regiony Rossii, Stat. sb. V2t. T.2*, M., 2000.
- Regiony Rossii, Entsiklopediya SNG*, M., 2001.

